
終末ノ村

N澤巧T郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終末ノ村

【Nコード】

N8675D

【作者名】

N澤巧T郎

【あらすじ】

山に囲まれた村に、一人の男が歩いてきました。

小さな村がありました。

周りを山に囲まれ、人の行き来は少ないものの、大きな事件も無く、平穏な暮らしをしていました。

そんな時、村の外れにある畑で、クルの実を収穫していたベイダが、遠くのほうから歩いてくる人影を見ました。

ボロボロの服をした男が目を見ました。

「あ…う、こ…ここ、は？」

意識がもうろうとしているようです。

ベイダが答えます。

「ここは村長の家だ。いきなり倒れるだもの。たまげたでなあ。でも良かったなあ。たいしたことなかんべえよ」

安心しきった顔でそういったベイダは、再びクルの実を棒でたたき始めました。

男はしばらく何もいませんでしたが、突然ガバツと体を起こすと、

「世話になった。すぐに行かなくては」

そう言ってスタコラと家を出ようとしています。

それを見たベイダはすかさず止めに入ります。

しかし男は聞く耳を持たず、さっさと家を出ようとしながら言いま

した。

「時間がない。もっと人がいないところに行かないと。巻き込んではいけない」

「待たれよ」

今まで静かに座っていた村長が呼び止めます。

「わかっておる。おみやあさんの荷物。調べさせてもらっちょうよ。おみやあさん。呼び人だべな」

斜め下のほうを見ながら言いました。

男の動きが止まります。

そして、今度はベイダの体が小刻みに動き始めました。

「ほんに呼び人…？おめさん…。本当かえ？」

「ああ。そうだ。だからわかるだろ。俺がココにいちゃいけない」とぐらい」

「こりゃ大変だあ」

ベイダは一目散に家を飛び出していきました。

村長と男の二人きりになった空間で、静かなときが流れました。

「ここでもんしゃい」

村長が静かに、それは静かに呟くように言葉を発しました。

その発言に驚いた男は目を見開きながら答えます。

「そんな、そんなこと、できるわけない。山を越えればもっと人のいないところだって」

話を切るようにして、村長が静かにしゃべりだします。

「なかるうもん。山、越えちようて人はぎようさんおりますけん。山に囲まれちようことは、その周りを人が囲んどるわけですけん。だもん、ここでやんしゃい。」

男は少しの間、言葉が出てきませんでしたが、搾り出すようにして言いました。

「だったら、少しでも避けるために山に行つて、そこで」

再び話しに割り込むように。

「それもいかんです。山は今、目覚めとるんよ。いま刺激でもしてみんしゃい。もっとすごかことになりますけん。だもん、ここでやんしゃい」

「しかし、しかし……そんなことをしたら、ここは……」

男はどの言葉を口から出せば良いのか迷ってしまいました。

「ええけん。ええけん。気にしくさるな」

ベイダが戻ってきて、明るく言います。

「みんなに話してきたがや。みんな準備をはじめちようよ。だけん、思う存分やつてくんしゃいな」

「でも…なんでそんな……」

男にはわかりませんでした。なぜこの村の人々が自分を助けてくれるのか。意味がさっぱりわかりませんでした。

「終わらせるんよ」

村長が男の求めていた答えをずばり言いました。続けて村長が答えます。

「呼び人なんてしてはいけん。ほんに人間はひでえことを考えなすった。たった一人に背負わせるもんじゃなか」

今まで斜め下に向けられていた村長の目が、男の目に向けられました。

しわくちやの顔にあつて、その瞳は本当に綺麗でした。

「おみやあさんも、つらかったなあ」

静けさの中にやさしさが詰まったその言葉を聞き、男は今までの人生を一瞬にして思い出しました。

みんなが助かるなら。

その思いで呼び人になり、その心、勇気に対し、盛大な祝いの席が設けられました。

しかし、それが終われば世間は冷たいものでした。

だれもが男を受け入れませんでした。

泊める宿や、家も無く、毎晩硬い地面の上で寝ました。

話しかけても逃げられ、人々は彼を孤独にさせました。

それでも彼は自分の使命を全うするため、人のいないところを求め、ココまでやってきたのです。

男は静かに目から涙を流しながら言いました。

「……………はい……………」

静寂が訪れて、まもなく、

「ベイダあ！！来たっちゃー！！」

と、外から知らせが届きました。

「そら、おいでなすった。そんに行くかえ」

「ホントにいいのか？」

男が聞くと、ベイダはあっさりと答えました。

「ええけんええけん。人は人の力になれる。だけん、オラたちはみんなあんたの力だ。好きなだけ使ってええ」

それでも男は事の重大さを知っていますから、この質問をぶつけました。

「死んでしまっても……………」

ベイダはさつきとほとんど同じ口調で、さもそれが当たり前だといわんばかりの軽快さで答えます。

「頭のかてえ人やがね。なんと言ったらええんよ。命は他の命のためにあんしゃい。ほれ、はよせえな。みんな待っちゃようよ」

ベイダはたまらず男の手を引いて外へ連れ出そうとします。

男は最後に村長を見て、すべての思いを5文字に載せて言いました。

「ありがとう」

村長はすべてを受け取り、無言で1回、2回と頷きました。

晴れていた空がまがましい色へ一変し、雲が渦を巻くように村の上空へ集まっています。

部屋の中で、村長は誰かに語るようにしゃべっています。

今まで聞いたどの音よりも、気味が悪く、今にも泣き出してしまいそうな鳴き声が、周りの山に反射して、村の隅々にこだましています。

異変に気づいた山の周りに住む人々は、山のほうへ目を向けていました。

すると、上空へと伸びる光が眼に飛び込んできました。

人々はすぐに、その場所に呼び人がいたことを悟ります。

しかし、言い伝えられていた話よりも、その光はとて太く、太陽よりも輝いていました。

光は世界中を駆け巡ったと、言い伝えられています。

そして、その光を浴びた人々は、みな同じようにある言葉を聞いていました。

「犠牲の上になりとつちよう平和の、どこが平和じゃけん。あきらめちゃいかんのよ。ほんにみんなが幸せになる方法を、探さないけんのよ。繰り返すことに慣れちゃいかんのよ。いつでも心を敏感にしとかなあ。これで終わればよか。なあ、ばあさま」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8675d/>

終末ノ村

2010年10月20日15時59分発行